九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

拍手の起源を探る ： 西洋古代史の史料を中心に

矢向, 正人
九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

https://doi.org/10.15017/1650617

出版情報：芸術工学研究. 24, pp.21-41, 2016-03-16. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

受付日：2015 年 11 月 2 日、受理日：2015 年 12 月 24 日

拍手の起源を探る
西洋古代史の史料を中心に

Investigating the Origins of Hand Clapping
Through Historical Materials of Western Ancient History

矢向正人 [1]
YAKO Masato

Abstract
The aim of this paper is to examine the origins of hand clapping mainly in Western ancient history. Firstly, whether human hand clapping is instinctive or acquired a posteriori is argued with several examples by infant and primate. Secondly, the relationship between hand clapping and music observed in the archaeological remains of the ancient Near East is surveyed. Thirdly, applause in the documents written in the ancient Greece is examined. In addition to the judgment of the right or wrong for applause by Plato's aesthetics and Epictetus philosophy, the Spartan election with acclamation is surveyed. Fourthly, based on these results, variety and organization of applause in the documents written in the ancient Roman age are discussed. Especially, custom of the applause in the audience with dictator or emperor, applauders in theater or courtroom, Cicero's view on the relationship between eloquence and applause, and the professional applauders with three cheerleading sections organized by Nero are chiefly examined. Finally, the examples of hand clapping described in the Old Testament are surveyed.

連絡先：矢向正人，yako@design.kyushu-u.ac.jp
1 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門
Department of Communication Design Science, Faculty of Design, Kyushu University

1.はじめに

本稿は、拍手することの起源について、西洋古代史を中心に検討する。現代において、拍手する行為は、演奏会・演劇・講演会・議会・宴会・スポーツ会場などの数多くの場で見られる。手を叩くことにより、賞賛・賛意・歓迎・喚起・感激・感謝といった感情を伝えることができる。では、人類はいつから両手を合わせてパチパチと音をたてたのだろうか。それを知るための手がかりは多くはないが、手を叩き合わせる行為は、古くから儀礼として、コミュニケーションの手段として行なわれていた。多くの社会現象に流行り廃りがあるのと違って、拍手したり手拍子をとることは、人間の文化において安定的な現象であるため、廃れることなく生き残ったと考えられている。本稿では、考古学資料に現れた拍手を概観したあと、古代ギリシアとローマの文献を検討し、拍手の起源について考える。

2.拍手はどこまで本能的な行為か

2.1.ジェスチュアにおける拍手の分類

拍手はどの程度まで普遍的なものか。まず、手を叩いて音を発する拍手は、二つの行為から成り立つ。両手のひらを合わせるという行為と、音を発するという行為である。これらは別々の行為なので、ひとつひとつ見ていこう。音を発せずに両手のひらを合わせる行為はどの地域にも見られる。非言語コミュニケーションを 653 のジェスチュアに分類したモリスの『ボディートーク：世界の身ぶり辞典（原著 1994 年刊）』によると、手のひらを合わせるジェスチュアは、祈り、挨拶、感謝、謝罪の４

つの意味で使われる。祈りは西欧が中心、挨拶と感謝はアジアに多いが地域差があり、謝罪は日本をはじめ西洋にも東洋にも見られるが地域差がある[1)]。他方、拍手は手のひらを合わせるのに加えて、音を発するという目的を持っており、目的に対して合理的な行為である。

では、手を打って音を発する行為は人間にとっての普遍的な行為なのだろうか。コミュニケーションの手段としたとき、この二つは相容れない。拍手が作り出す音は騒音であり、円滑なコミュニケーションにとっては妨げになる。拍手は騒音を発するという現象を伴うため、非言語コミュニケーションにおける通常のジェスチュアとは意味づけが違っている。『ボディートーク』の 653 のジェスチュアにも、拍手は含まれていない。騒音を発しながら親密さを作るというアンチノミーに、モリスは対処の術を見つけようとしなかったと考えられる[2)]。

しかし、手を使って音を発する行為は拍手のみではない。拍手に似たジェスチュアにも音を発する行為がある。例えば、片方の手のひらを広げもう一方の手を拳にして打つ動作は日本人に特徴的なジェスチュアであり、「納得」「合点だ」を意味する。腿を手のひらで叩いて音をたてるのも同じ意味になる。西アフリカでも同様で、交渉などを取り決めるときにこのジェスチュアをすることがある。しかし、西洋では、同じジェスチュアが反対に敵を討つ動作になり、戦いを欲する意味になる（Hamiru-aqui 2004:41,121)。手を叩くジェスチュアは、ジェスチュアとしてたとえ安定的であるとしても普遍的ではない。

2.2.乳児の手を叩く行為

手を叩き音を発することが身体運動の安定的な到達点であるとすれば、その技術の習得は、人間の成長過程におけるひとつの成果と見られなければならない。赤ちゃんが生まれたとき、手は閉じており、まだ物を持つことができない。生後 3 ヶ月になると、赤ちゃんは、手が体の一部であり、手の中におかれるものを制御できると思い始める。 生後 5 ヶ月から 6 ヶ月になると、一方の手から他方の手に物を渡すことができる。この達成は、手を叩く技術を学ぶうえで大きな一歩である。そして、生後 6 ヵ月で手を叩くことがある。それは 2 本の手を合わせようとする運動であるが、拍手といえるものでなく、音が発せられなかったり両手が接触しないこともある。しかし、生後 9 ヶ月になると、多数の赤ちゃんは、音をたてて拍手することができる[3)]。

赤ちゃんは、本能的に手を叩いているように見えるが、そこに発達をたどることができる。まず、拍手するためには、両手がひとつの目的を達成することを知らねばならず、そのためには、手で何が可能であるのかを前もって知っていなければならない。また、拍手するためには手を回転して動かす技術が要る。手を叩くことに対する赤ちゃんの関心には個人差があるが、拍手して音が鳴れば、ひとりで拍手を練習する気を起こさせる。手の回転の技術という観点からすると、拍手すればするほどその技術は発達する。他者の拍手に関心を示すなら、習得は加速する。

そして次の段階で、赤ちゃんは、喜びの表現としてのみでなく、新しい何かを可能とするジェスチュアであるという理由で拍手し始める。生後 1 年になると、拍手しながら微笑んで挨拶する。そのときには、人に向き合って幸せで満足であることを拍手で表現するだけでなく、拍手することがそれ以外に意味を持っていることを知っているはずである。それは身体的、精神的な進歩の証拠である。

2.3.霊長類の手を叩く行動

拍手する行為に発達の段階があるとしても、その習慣は歴史の中のある時期に生じて広まったのだろうか、本能として備わっている行動なのだろうか。手を叩く行為は人間に限ったことではない。動物行動学には、サルが手を叩く行動について以下のような研究がある。

人間に限らず霊長類は二足歩行ができるため、両手の自由が利く。ゴリラはよく手を叩くことが観察される。餌を要求するときなど他者の気を引く目的で手を叩く。片手あるいは両手で地面を叩いたり、木を叩くこともある。それは威嚇なのか、感情の表現なのかはよく解らないが、人間に近い動きであるのは確かである。しかし、拍手が観察されているゴリラの多くは、飼われたゴリラである。とすれば、人間から手を叩くことを学んだかもしれない。それを調べるためには野生のゴリラを観察しなければならない。

30 年以上前にフォッシーは野生のマウンテンゴリラ（の二つの種）が手を叩くのを観察している。しかしこのメスは 4 年でこの行動をやめている（Fossey 1983）。また、フェーイは、中央アフリカ共和国のニシローランドゴリラが拍手するのを目撃し、それがヒトの観察者へ

の反応であると述べている（Fay 1989）。その後、オックスフォード・ブルックス大学のカランとレイニーの研究チームは、中央アフリカの野生のニシローランドゴリラが手を叩く行動を調査した（Kalan;Rainey 2009:273-275）。まず、5匹のメスゴリラが手を叩くのが目撃された。4匹は子供と一緒で、子供の前で素早く2回連続して手を叩くことが何度か観察された。メスが手を叩いたのは、ヒトに観察されていることをオスに知らせるためであり、この音に応えて一匹のオスが木から10m のところに隠れて手を叩いて大きなうなり声を発し、ヒトの観察者を威嚇するために支え木の根を叩いて胸を打ったとある。他方、木の上の３匹のメスゴリラが１分ほどの間隔をあけて5回ほど連続的に手を叩くのが目撃された。カランによれば、人間の観察者が脅威をもたらさなくなった後にも、メスは手を叩いてオスと接触を求めていた。この他、母ゴリラが子供の前で突然手を叩くと、子供が遊ぶのを止め、他の大人たちも食物漁りをやめるのが目撃されたとある。そのあと全員が母の視線を追って人間の研究者を見ると、すぐにその場を去っていった。

以上の観察をもとに、カランとレイニーは、ニシローランドゴリラが手を叩くのは、遠距離交信により家族のまとまりを保つため、子供のふるまいをコントロールするため、オスの注意を得るためであり、人間が差し迫った脅威をもたらしていないときでも、手を叩くことが頻繁にあると述べている。

スターリング大学のロバーツによると、ウガンダのチンパンジーの手を使った行動を観察したところ、拍手を含む20〜30通りのパターンが抽出された。チンパンジーは、食べ物が欲しいときには物乞いするような動作をし、他のチンパンジーに接近を望むときには手招きするような動作をするが、手を叩くのは興奮もしくは熱中するときであると述べている（Roberts 2012:582）。ロバーツは、拍手を含むこれらの手を使った行動は、人間のジェスチュアと多くの共通点をもつため、言語進化の出発点として位置づけられるのではないかと述べている。言語を駆使できる人間から見れば、手拍子であっても拍手であっても、手を叩くことは、言語で表現しにくい賞賛などの意図を、過不足なく表現するための補助的な行為でしかないが、語彙が少ないサルでは、手を叩く行動は、コミュニケーションの一手段であり、その行動がもつ比重は人間のそれよりずっと大きい（Kalan;Rainey 2009:273-275）。

しかし、ここで少し考えてみよう。ゴリラやチンパンジーの拍手が熱中を示すとしても、コミュニケーションのための行動という観点からすると、熱中することと賞賛することはかなり異なる行為である。 端的に言えば、熱中は自分に向けている行動であるが、賞賛は他者に向けている行動である。賞賛することは評価することでもあり、評価するためには、比較する対象が暗に仮定される文脈がなければならない。賞賛のための拍手が生得的な行動であるという証拠は、今のところ見出されていないようだ。そして手を叩くことが獲得されたジェスチュアであるなら、それらは異なる社会や文化の間で異なる行為であるはずである。本稿では、こうした問題も史料から読み解いていきたい。

2.4.手を叩く行為の指標

もうひとつ考えておかねばならないのは、ゴリラやチンパンジーが手を叩き合わせるときには音を発していることである。筆者が動物園などで観察した範囲でも、サルが手を叩いて音が発せられないジェスチュアは確認していない。サルに限らず霊長類が手を叩く行動は、あくまで音が発せられ聴かれることを前提にした合理的な行動であることが見落とされてはならない。

ここで手を叩くときの音の指標を明確にしておこう。まず、拍手音は，ひとりの拍手者による「個別拍手音」と、多人数の拍手者による「集合拍手音」とに分けられる。この二つはまったく異なる様相を呈する。次に、拍手では、速度（拍手の密度）の差異が明確な指標になる。狭い時間間隔で手を叩く行動は、動物にはあまり見られない。人間が手を叩くときには、遅い拍手と速い拍手とは意図的に叩き分けられている。速度の差異は相対的なものだが、少なくとも日本語では、手拍子と拍手が明確に区別され、それぞれは異なる意味を持つ。次に、拍手の音色も指標になる。手を叩くときの、手の形状と打ち方は異なる拍手の音色を作り出す。考古学や歴史の資料にこれらの指標に関する記述は多くはないが、本稿では注意して見ていく。

3.考古学資料にみる手拍子

3.1.手を叩くことと楽器

手拍子として手を叩くことを、音楽の演奏とみなすことができる場合がある。手拍子は音を発するもっとも簡

単な手段であるため、先史時代から、歌と舞踊の伴奏として打たれていたことがわかっている。発せられた音がリズムとして聴かれるなら、これを音楽の演奏とみなすことができる。叩いて音を発する手段としてみるなら、手を叩くのは、それが手っ取り早いからであり、手近にある物を叩いても音を発することができる。手を叩くよりも、もっと音がよく鳴る物があるなら、それを叩いた方が良いことになる。エジプトとメソポタミアに多数存在するクラッパー（拍子木）は、両手にひとつずつ持って打ち合わせる楽器であるが、手を叩くことから発達した楽器であると考える研究者が多い。事実、これらの地域の音楽と舞踊には､現在でも手拍子を伴うものが多い。これらの背景を踏まえて、以下、西洋古代文明に現れた手拍子を考古学資料から検討しよう。

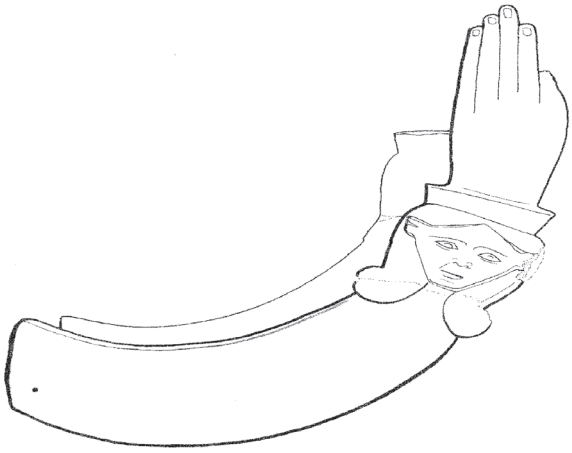

図１　手の形を模した象牙製の拍子木

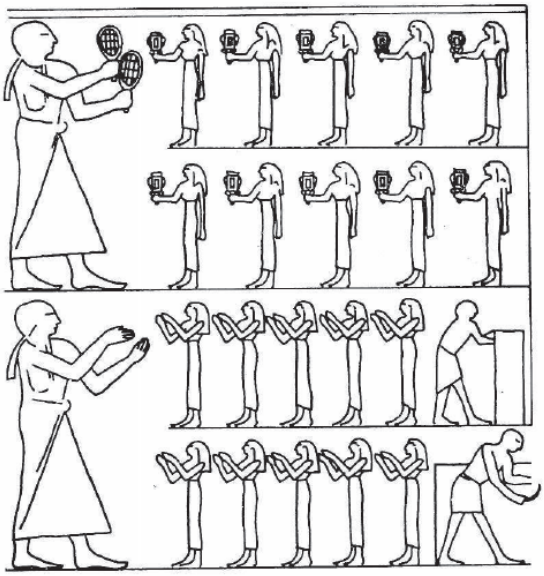

図２　手拍子の教習（テーベの死者の都：51 墓壁画）

3.2.古代エジプト

古代エジプトで手拍子が打たれていたことが、レリーフとヒエログリフについての研究からわかっている。カイロのエジプト考古学博物館の収蔵楽器目録を作成した音楽考古学者ヒックマンは、ヒエログリフの検討にもとづき、手拍子はファラオの時代にも、今日のエジプトやヌビア地方の音楽や舞踊と同じように、大きな役割を果たしていたと述べる（ヒックマン 1986:84)。「ちょうど騒々しい音をたてる鳴物が猛獣を驚かせて追い払うのと同じように、手を打ち合わすことは、最初はただ悪霊を寄せ付けないようにするためだけのものであったはずである。しかし、その後すでに早い時期に、足を踏み鳴らし、手を打つことは、音の微妙なニュアンスとデュナーミクの変化に富んだ表現とを可能にし、そしてリズムを作り出す一定の楽器が発明されることになった。」（ヒックマン 1986:18)。例えば、中王朝以来（紀元前 2040 年頃〜)、女神ハトホルをたたえる礼拝で、人間の左右の手のかたちを模した象牙製の拍子木（**図１**）が使われていた（ヒックマン 1986:50)。拍子木が手のかたちを模したとすれば、それは手拍子の代替であることになる。

中王国時代には、指導者が手拍子の教習をしていた。エジプト学者マニケは、デルタ地帯のコム・アル＝ヒスヌには、予言の管理者でありかつ歌手の指導者であったケスウェルという人物の墓があるが、そこに当人が手拍子の打ち方とシストルム（ガラガラ）の振り方を教えている図（**図２**）があると指摘する（マニケ 1996:221、ヒックマン 1986:50)。手拍子が教えられたとするなら、単純なリズムと複雑なリズムとを叩き分けたであろうし、音色の差異を作ることもできたであろう。実際、手の叩き方はひとつではないことがわかっている。中王朝時代の壁画には、２種類の手拍子の方法が描かれている供養碑がある。すなわち､手のひらを平らにして打つ方法と、手のひらにくぼみをつくって打つ方法である（マニケ 1996:77)。そしてこれらの技術を使って、シストルムが漫然とあちらこちらに振られているなかに、手拍子がリズムやテンポを作っていくような音楽が演奏されていたと想定できる。このとき手拍子は合奏のなかの締めの役割を担っていることになる（ヒックマン 1986:59)。

他方、古代エジプトには、手拍子の伴奏で歌いあるいは踊る習慣が古くからあった。ナイル河を讃える呪文『ナイル賛歌』には、11「おおナイルよ、この地よりいで、エジプトを生かさんがため、来たれるもの、人々は竪琴

をもて、汝のために歌い、手もて汝のために歌う」（杉 1978:619）とあり、手拍子の伴奏で歌っていたことがわかる[4]。他方、エジプトでは、家で仕事のとき歌いながら手を叩き家の主人を賞賛する習慣もあった。

ヒックマンとマニケが提示した図像資料にも、手拍子を数多く見ることができる。中王朝時代には、一人の歌い手に手拍子のみあるいはハープのみで伴奏をしている図像、家の主人の前で女の歌手と手拍子をとる女たちがしゃがんで演奏している彫刻などが見られる。新王朝時代（紀元前 1570 年頃 － 紀元前 1070 年頃）には、楽器奏者に加えて手拍子の演奏者の名前が記録されるようになる。前を行く笛の演奏者に従って３人の手を叩く楽士が歌を歌いながら行進している図像、楽器をもたずに、手拍子を打ちながら歌っている楽士の姿を描いた図像も見ることができる。

手拍子が打たれている状況は、歴史書にも記述されている。ギリシアの歴史家ヘロドトス（紀元前 484 年–紀元前 425 年 ）の『歴史』第 2 巻（エウテルペの巻）には、平均的なエジプト人がどのように祭礼を祝ったかについての記述がある。次の引用は、女神アルテミスのためのブバスティスの祭りの模様である。2. 60「ブバスティスの町に参集するときの模様はこうである。男女一緒に船で出かけるのであるが、どの艀も男女多数が乗り込む。カスタネットを手にもって鳴らす女がいるかと思えば、男の中には船旅の間中笛を吹いているものもある。残りの男女は歌をうたい手を叩いて拍子をとる(κροτέω)」（ヘロドトス 1971 : 200）[5]。ギリシア語の κροτέω は手を叩く意味の他に、がちゃがちゃ鳴らす、指などをぱちんと鳴らすなど、叩いて音を出す意味がある。引用文は、κροτέω を手拍子の意味に解釈しているが、歌や楽器と併記されているので、演奏のなかで手拍子が打たれているとする解釈が妥当である。

ここまで手拍子を音楽の一部として検討したが、古代エジプトに歌や舞踊を賞賛する手拍子というものは存在したのだろうか。この問いには、楽士が演奏している側で手を叩いている人の図像が多数残されているので、存在した可能性があるとのみ述べておく[6]。

3.3.メソポタミア

メソポタミアでは、手拍子はさらに大きな役割を果たす。ラシードは、歌、踊り、楽器演奏に合わせて手拍子を打った最古の例として、ウル王室墓地（紀元前 2100 年頃）墓 PG1332 から出土したリラの共鳴胴前面のシュメール象眼細工の例を挙げている（ラシード 1985:48）。同頁のルーブル美術館蔵の石碑にもほぼ同じ手拍子が見える。紀元前 880 年頃とされるカルフ北西宮殿の石碑には、ライオンの仮面で仮装して手拍子を打ちながら踊る姿が彫られている（ラシード 1985:116）。紀元前 668～紀元前 627 年頃の浮彫には、アッシリアの歩兵が歌ったり手拍子を打ちながら戦地に向って行軍しているようすが彫られている（ラシード 1985:134）。ラシードによると、アッシリアでは軍の遠征に音楽家が同伴していた。彼らが打つ手拍子を描いた図像を見ると、手拍子にも、空洞にして打つ打ち方と、手のひらで打つ打ち方の違いが描き分けられている。他方、メソポタミア北部のパトラ出土の建築物の小壁には、楽器演奏者と歌手の他に、婚礼客が描かれている。婚礼客は「手拍子を打ち、指を鳴らし、口笛を吹いてその喜びを表現している」（ラシード 1985:160）。この建築物は紀元 160 年頃のものと推定されているが、手拍子もしくは拍手が喜びあるいは賞賛を表現している例である。

3.4.古代インド

インド音楽でリズムや拍節法の意味に用いられるターラという概念は、もともとは、手拍子もしくは手拍子を強調する楽器であるシンバルの意味で用いられた。マハーバーラタの物語にも、兵士たちが手拍子を打つ姿が描かれている（カウフマン 1986:114）。マトゥラー地方の彫刻（1～3 世紀）には、演奏のときに手拍子でリズムを強調しているように見える図が刻まれている（カウフマン 1986:124）。パールフット遺跡（紀元前 2 世紀～紀元前 1 世紀）の浮彫、ガンダーラの彫刻（1～2 世紀）、アジャンターの壁画（6 世紀頃）においても、楽器や舞踊に加えて手拍子をとる人物が描かれている。アマラーヴァーティーから出土した浮彫（2 世紀頃）には、２人ずつ向かい合って手拍子をとる姿が刻まれている。これらの資料から、古代インドの演奏でも手拍子は一定の役割を果たしたことがわかる。

3.5.図像資料から読み解けるもの

エジプト、メソポタミア、インドの手拍子を概観した。手を合わせているだけではなく、叩いて音を発しているらしいこと、リズムを刻むなど音楽の中の役割を持っていたことが検討できた。

しかし、手拍子がどのようなタイミングで打たれているのかは、もちろんわからない。手拍子と言っても、歌に合わせて拍子を刻む手拍子のみではない。合の手を入れているところかもしれないし、合の手のタイミングもさまざま考えられる。図像からこれらのタイミングを推察することは不可能である。例えば、今日でも、集団の行事で歌う旋律において、歌の切れ目に手拍子が打たれることがある。こうしたときの手拍子は、伴奏やリズムをとるためでなく、旋律の切れ目を示すために打たれていることが多い。今日の手拍子をもとに推察すると、解釈に誤りを犯すことになる。

ここで、もうひとつ考えておくべきことは、手を打つときに歓呼があがっているかどうかである。今日の劇場や演奏会場では、拍手は歓呼を伴うことが多いが、古代における拍手は、拍手のみであったのだろうか、それとも歓呼を伴ったのだろうか。図像からそれを確認することは難しく、文脈から検討していく必要がある。古代ギリシア以後の文献には、手拍子よりも拍手の記述が増えるので、本稿では、これらの点に注意して見ていく。

4.古代ギリシアの文献にみる拍手と手拍子

4.1.拍手と手拍子の諸相

古代ギリシアの音楽、舞踊、美学については、多くの文献が残っている。紀元前5世紀頃の古代ギリシアで、演劇を見てその内容を褒め称える意味で手を叩いていたことがわかっている。古代ギリシア劇にはコロス（合唱隊）が付きもので、朝から夕方まで音楽を伴って劇を上演していた。演劇を行う場所は半円形の空間「オルケストラ（orchestra）」で、コロスが踊り歌った。摺り鉢状の観客席も残っており、観客がそこから拍手したと考えられている。この他、オリンピック競技における拍手を見逃せない。競技に対して4万人の観客が埋めつくした観客席から拍手喝采が送られたことがわかっている（ペロテット 2004:15）。

まず、手拍子が音楽として使われていた例から見ていく。紀元前8世紀中頃にアッティカで出土した壷には、踊り手の一人が空中に跳び上って両腕を頭上に振りかざし、他の踊り手たちが手拍子を打っている輪舞が描かれている（ヴェーグナー 1985：26）。同じ時代の文献であるホメロスの叙事詩『オデュッセイア』にも、手拍子と解釈できる記述が見られる[8]。「(ハリオスとラーオダマースは)しきりに球を投げ交わしつつ二人で踊りまわる。その間ほかの若者たちは演技の場につっ立ったまま拍子をうち続けた（ἐπελήκεον）ので、夥しい物音が湧き起こった（ホメロス 1971:241）」。拍子をうち続ける行為は手拍子と解釈するのが妥当であろう。因みに、ホメロスに関連する手鳴らしで、手拍子を打っているのではないと解釈されている例を述べておく。2 世紀頃の作家アテナイオスの『食卓の賢人たち』には、1.27「ホメロスでは＜中略＞ほかの者たちはまわりに立って、人差し指でぱちぱちと音をたてる（ἐπικροτέω）」（アテナイオス 1997:54）とある。古代ギリシアでは、手拍子のみならず指鳴しも音楽や舞踊のリズムを作るために頻繁に用いられていた。音楽史家のウエストは、アテナイオスへの言及はないものの、指鳴しの記述を含む古代ギリシアの文献を列挙している（West 1994:133）。

アリストパネス（紀元前 446 年-紀元前 385 年）の喜劇『蛙』には、音楽として手を打っている男女の記述がある。157 ヘーラクーレス「それから笛の音が風のようにお前をつつむだろう。そしてその地上のような明るい光が見え、また、ミルテの森や、男女の至福の信者の群れや、彼らが手をしきりに打つ（κρότον）光景が表われる。」ディオニューソス「どういう人々だ。」ヘーラクーレス「入信者たちさ」（アリストパネス 2009：213-214）。アテーナイ北部で行なわれた秘儀の入信者たちの手を打つ行為の記述である。文脈からは、音楽の中のひとつの行為としての手拍子であると推察される。

クセノポン（紀元前 427 年-紀元前 355 年）の『キュロスの教育』には、挨拶の拍手、喜びを表現する拍手が描かれている。8.4.12「つまり、わが君のご幸運を自分も喜んでいますのをどのようにお示ししましたらよいのかが、分かりません。拍手（ἐκρότουν）するとよいのでしょうか。笑うのがよいのでしょうか、どのようなことをするのがよいのでしょう」（クセノポン 2004：375）。この拍手は賞賛を伴う挨拶であるが、賞賛の意味での拍手は、筆者が知る範囲では『キュロスの教育』が最古である。ここで拍手は笑いと同等の役割をもつ行為として記述されている。

同じクセノポンの『シュンポシオン』[9]には、囃し立てる意味の拍手が描かれている。9.4「彼女（アリアドネ）は恥ずかしそうだったが、しかしそれでも愛情を込めて彼（デュオニソス）を抱き返していた。饗宴の客たちはこれを見て、拍手（κροτέω）しながら同時に、「もう一度」と叫んでいた」（クセノポン 2006:117）。拍手して賞

賛する行為に加えてアンコール（αὖθις）の声があがった例としても見落とせない。

時代は下るが、二世紀の地誌学者で旅行家であったパウサニアス（115 年頃–180 年頃）の『ギリシヤ案内記』には、画家ポリュグノトス（紀元前 500 年頃–紀元前 440 年頃）の絵画の中に描かれる手拍子が何を意味しているのかを説明している箇所がある。10. 31「両者の真上にパリスがいて、髭など生えていない。両手で拍子（κροτέω）を打っているのだが、まるで野暮な男の手拍子だ。パリスは手拍子の音でペンテシレイアを自分のほうに呼び寄せようとしている様子に見てとれる、とあなたは言われるかもしれない。確かにペンテシレイアもパリスのほうを見やってはいるのだが、彼女の顔の傾き加減からすると視線は彼を通り過ぎていて、彼のことなどまったく眼中に置いていない」（パウサニアス 1992:292-293）。手拍子は意中の人物を振り向かせるために打たれていると説明されている。また、この記述から、手拍子には巧拙があり打つのに適するシチュエーションがあったことがわかる。

4.2.競技会における拍手

オリンピックの観客が手を叩き音をたてて応援している光景が、歴史家ポリュビオス（前 204 年？–前 125 年？）の『歴史』第 27 巻 9 章に描かれている。8–10「アリストニコスはギリシアに着き、オリュンピア競技祭でクレイトマコスと相対した。すると観客は、＜中略＞一もなく二もなくアリストニコスの肩を持って、声援を送ったというのである。そして試合が進むうちに、アリストニコスが互角の戦いぶりを見せ、それどころか相手の急所に拳を命中させたときには、拍手喝采（κρότος）が起こり、観客は興奮のあまりに跳び上りながら、アリストニコスに声援を送り続けた」（ポリュビオス 2013b:115）。競技者の一方に肩入れする興奮を伴った拍手である。

観客は競技会の勝者と敗者をあらかじめ知ることはできないし、どんな局面で誰に拍手を送るかも前もってわからない。競技会では予期していない状況が絶えず生じる。ローマの歴史家プルタルコス（後 47 年頃〜127 年）『対比列伝（英雄伝）』の「テミストクレース」には、臨席した人物に対する拍手の記述がある。17「オリュンピアの競技に、テミストクレース（紀元前 522 年頃-紀元前 457 年頃）が競技場に到着すると、見物していた人々は競技の方をいい加減にして、一日中この人ばかり眺め、外国の人々にもそれを指さして賛嘆の拍手をした」（プルタルコス 1952:105-106）。オリンピアの観客たちは、競技を応援するよりもペルシア戦争に戦功があったテミストクレスが偶然にも臨席したことに驚いて拍手を送った。

古代ギリシアでは、デルフォイをはじめとして、オリンピア、ネメア、イストミアのいわゆる四大競技祭で音楽競技が催されていた [7]。パウサニアスの『ギリシア案内記』には、競技祭での弾き歌い競技に出席していた英雄に向けられた拍手喝采の記述がある。8. 50「アルゴスがネメア祭を開催した際、英雄（ピロポイメン）はキタラ琴による弾き歌い競技の場に出席した。競技会にメガロポリスのピュラデスが出ていた。かれは、この琴の弾き歌い手としては同時代の演技者のなかで一番人気があり、ピュティア祭（デルフォイ）での勝利を手にしていた。そして、この時はミレトスのティモテオスの曲『ペルシア人』を歌ったが、「ヘラスに、自由という名も高く偉大な飾りを、創り出す人……」と歌いはじめると、ギリシア人たちは英雄（ピロポイメン）の方へ注目し、いっせいに拍手（κρότῳ）して、この歌が英雄のことを歌っている、という合図を送った」（パウサニアス 1991:581）。この拍手は歌に向けられた拍手であるとともに、臨席している英雄が歌に読み込まれていることを当人に知らしめ賞賛する拍手である。

4.3.プラトンにみる拍手

プラトン（紀元前 427 年–紀元前 355 年 ）の初期の対話篇『ラケス』には、戦場で失態を演じたステシレオスに対する拍手が笑いとともに描かれている。183e–184a「彼が闘っているうちに、その鎌槍がどこか相手の船の道具に引っかかって、そしてしっかりと掴まったのです、そこでそのステシレオスははずそうと思って引っぱりました、ができませんでした、＜中略＞と、笑いと拍手（κρότος）とが運搬船の人々から彼の恰好を見てあがった」（プラトン 1973:244）。この場面の拍手と笑いは賞賛ではなく、ぶざまな恰好に対する嘲笑である。

さて、古代ギリシアのポリス社会では雄弁家の問答の場が多数あった。その場に居合わせた人々はソフィストを褒め讃えあるいは応援のために拍手した。ソフィストの問答を応援する拍手について、プラトンがその是非を述べている。

『エウテュデモス』には、ソフィストたちの問答を拍手で応援するようすをソクラテスが皮肉まじりに述べて

いる箇所がある。276d「さて、こうなると、あの両人の愛好者たちは両人の知恵を讃歌しながら、途方もない大声で笑ったり喝采（Θορυβέω）したりした。しかし、われわれ残りの者はびっくり仰天して黙っていた」(プラトン 1975:17)。拍手喝采が笑いとともに描かれている。文中の喝采の語は κροτέω ではなく、喧噪を伴う賞賛を意味する Θορυβέω である。現代のギリシア語では、Θορυβέω は人だかりでの非言語的な喧噪の音や野次りの意味で用いられ、歓呼や声援の意味は持たないとされる。この語が何を意味するのかは文脈によって異なるが、足を踏み鳴らしたりベンチをドンとたたくなどの意味もある。303b「すると、ここで、なんと、クリトン、そこに居合わせたものは誰でも彼でも言論と両人とを法外に賞めたたえるのだよ、そして笑い、手を拍ち（κροτέω）、喜んでもう延びんばかりになったのだ。というのは、今までのものには、どれにもこれにも見事な喝采を送っていたのは、ただエウテュデモスの愛好家連だけだったが、ここではほとんどリュケイオンの柱でさえも両人に対して喝采し（Θορυβέω）喜んだのだからね」（プラトン 1975:97)。喜び過ぎて倒れそうになるまで強烈な拍手と笑いで問答を誉めたたえ、さらにリュケイオンの体育場（ギュムナシオン）の柱そのものが喝采し賞賛したと擬人化して表現される。

『プロタゴラス』には喝采が歓声として描かれている。339de「このように彼が言うと、聞いていた多くの者は、はやしたてたり(θόρυβον)賞賛したりした。最初ぼくは、ちょうど拳闘の名人に一撃をくらったような気がした。彼がこういうことを語りおえて、ほかの者がそれにやんやと歓声（ἐπιθορυβέω）をあげたとき、くらくらと目がくらみ、目まいを感じたのだ」(プラトン 1975:179)。ソクラテスとソフィストのプロタゴラスが問答で競う場面でのプロタゴラスへの賛辞である。相手方の演説と歓声を聞いて、衝撃と眩暈を覚えたとあることから、歓声や拍手は論争の行方にも影響を与えたことがわかる。なお、引用文中の ἐπιθορυβέω は叫び声の意味である。

4.4.プラトン美学における拍手の位置

プラトン中期の『国家』にも、論争での拍手の記述がある。492bc「彼ら大衆が国民議会だとか、法廷だとか、劇場だとか、陣営だとか、あるいはその他、何かの公に催される多数者の集会において、大勢いっしょに腰をおろし、大騒ぎをしながら、そこで言われたり行なわれたりすることを、あるいは賞賛し、あるいは批難する-どちらの場合も、叫んだり手を叩いたり（θόρυβον）しながら、極端な仕方でね。さらに彼ら自身に加えて、岩々や彼らのいる場所までが、その音声を反響して、非難と賞賛の騒ぎを倍の大きさにするのだ」（プラトン 1976a:439)。叫び声や拍手による賞賛と批難が描かれている。非難の意味を持つ拍手については後述するが、岩による反響によりそれらが持つ意味も倍増する。いずれにせよ拍手や大声を出すことは、極端な動作であるため大音量をもたらしてしまう。

続いて、そういった賞賛や批難に対する対応の仕方が教唆される。492c「このような状況のただなかにあって、若者は、誰にも言うように、『いったいどのような心臓になる』と思うかね？個人的に受けたどのような教育が、彼のために抵抗してくれると思うかね？そんな教育などは、このような非難・賞賛の洪水のために、ひとたまりもなく呑みこまれて、その流れのままにどこへでも流されて行ってしまうとは思わないかね？そしてその若者は、彼ら群衆が美しいと主張するものをそのまま美しいと主張し、醜いと主張するものをそのまま醜いと主張するようになり、彼らが行なうとおりのことを自分の仕事とするようになり、かくて彼らと同じような人間となるのではなかろうか？」（プラトン 1976a:439)。プラトンは、賞賛や批難に惑わされ迎合してはならないと述べる。プラトンによれば、見たままありのままに反応することは、善や美の普遍的なあり方を見失わせることになり、堕落をもたらすことになる。この考え方にもとづくなら、眼前のものに対する直接的な反応である拍手歓呼も、明言されてはいないが、ありのままの反応に加担する行為であることになる。『国家』では、諸価値を普遍的に論じようとする態度こそが国を守る者としてのあるべき行為であるとされた。

後期の『法律』は、ポリスの民としてとるべき行為の類型が提言される書であるが、拍手の是非にも言及がある。音楽について述べられている箇所を引用する。700b「当時からわたしたちのもとでは、音楽は、それ自身のいくつかの種類や形態に分類されていました。歌の一種類に、神々に捧げる祈りがあり、それは賛歌（ヒュムノス）という名称で呼ばれていました。さらに、これに対応するものとして、別の種類の歌があり、それは、まず悲歌（トレーノス）と呼べばいいものだったようです。また、アポロン賛歌（パイオーン）がいま一つの別の種

類で、さらにいま一つのものとしては、ディオニュソスの生誕を扱ったものと見られますが、いわゆる酒神歌(ディテュランボス）と言われるものがありました。さらにまた、それらとは別の種類の歌として、まさに「ノモス」というこの名称で呼ばれるものもありました。もっともこれには、「竪琴に合わせて歌われる」という言葉がそえられていました。さて、他にも若干のものを加えて、こうした区別がしっかりと定められていましたから、異なった種類の旋律を、別の種類の旋律に適用することは、許されなかったのです」（プラトン 1976b：232-233）。プラトンによれば、音楽には分類があり秩序がある。音楽とはこの分類と秩序の認識方法であり、旋律もこの定められた秩序のもとで区別して認識されなければならない。音楽は、これらの秩序を定めている言葉＝ロゴスとして演奏され聴かれるべきものとされる。

続いて拍手について次のように述べる。700b,c,d「そして、これらの区別を認識し、認識した上で判定し、さらにそれに従わぬものを懲罰する権威は、今日のように、大衆のやじり声でもなければ、粗野な叫びのごときものでもなく、また称賛をあらわす拍手（κρότοι）でもありませんでした。むしろ、一方、教養を身につけた人びとに対しては、自分の耳で最後まで黙って聞くように、定められていましたし、他方、子供たちや子供の養育係り、その他一般の群衆に対しては、懲らしめの鞭という戒律が置かれていたのです。したがってこれらの面では、大部分の市民たちは、みずからすすんでこのようにきびしい秩序の支配をうけようとしたもので、騒がしい叫び声による判定を行なおうなどと、あえて企てたりはしませんでした」（プラトン 1976b：233-234）。これらの記述から、音楽に対して拍手する習慣があったこと、また、拍手を本来あるべき音楽の評価方法として認識していなかったとことがわかる。プラトンによれば、拍手は正しい音楽には不要であり、黙って耳を傾ける態度こそが望ましい聴き方である。拍手については、音楽を賞賛する行為として、大衆のやじり声や粗野な叫びと同列のものとして述べられている。プラトンにとっての正しい音楽は、多くの人に賞賛され評価されることとは無関係に存在するものであり、そのために拍手歓呼は邪魔なものであった。

他方、『法律』には、拍手の介在を看過する記述もある。700,d,e「ところが、その後時代がすすむにつれて、音楽のたしなみにそむいた違法を先導する者として、詩人たちが、−素質の面では詩人の才能を持ってはいるが、ムッサの定めた正しさや法規については無知にひとしい詩人たちが、＜中略＞無知ゆえにそれと気づくともなく、音楽に関するこんな誤った意見まで主張したのです。「音楽とは、およそ正しい基準など、わずかばかりもありはしない。むしろ、すぐれた人であれくだらぬ人であれ、これを楽しんできく人の快楽を基準として判定されるのが、最も正しいのだ」と」（プラトン 1976b：234）。

プラトンは、知の探求という立場から『国家』において喝采を否定しようとしたが、違法の快楽のための音楽に対してはこの限りではなく、『法律』では、こうした快楽のための音楽が現実に蔓延りつつあることに対する達観もある。『法律』では野次や拍手について、あえて否定しようとはしない。

4.5.スパルタの喝采の音量による選挙制度

アテネでは、評議会などの担当者を決定するとき抽籤が使われていたが、スパルタでは、喝采が選挙において大きな役割を担っていた。プルタルコス『対比列伝（英雄伝）』の「リュクルゴス」には、スパルタの民会における官職の選挙では、「喝采の音量」を用いた多数決制がとられたと記されている。26「その選挙はかういう風に行なわれた。人々が民会に集まると、選ばれた人々がその傍の家の中に閉じ篭って集まっている人々を見ることができず、見られもしないがただその声（κραυγήν）だけを聞くようにしておく。他の場合と同じく大声で候補者の中から決めるのであるが、それらはすべてが一緒になっていたのではなくて、一人一人籤によって導き入れられ、黙ったまま民会の間を通り過ぎる。さて選ばれた審判官たちは書物板を手にして一人一人について声の数を記して行き、呼ばれたのが誰であるかを知らずに、ただ導き入れられた人の一番目とか二番目とか三番目とか何番目とかといふことだけがわかる。一番多く一番大きな声で叫ばれた人を当選者と決定する」（プルタルコス 1952： 138-139）。

まず、5 人の公平な検討人が机が置かれた別室に入る。次に、候補者たちが籤の順番で、民衆の前に進み出て壇上にのぼり、支持者に喝采を受ける。そして、別室の検討者によりもっとも大きな喝采を受けたと評価された候補が勝者となった。原文の κραυγήν は金切り声の意味であるが、壇上の候補者への喝采が歓声のみであったとは考えにくく、拍手を含めた声の大きさであると解釈する

のが妥当であろう。

スパルタの選挙はアテネのそれのような慎重で言葉を尽くした議論を欠いている（Cartledge 2001:51）。このため、アリストテレスは『政治学』で、スパルタの選挙制度を「けれども、この役は、すべての人のうちから選ばれるべきであろうが、しかし今日行なわれている仕方によるべきではないだろう。それはあまりにも子供らしいものであるから。」（アリストテレス 1961:105-106）と批判している[10]。しかし、喝采による選挙は、一人複数投票においては、公平に実行されるならば、合理的な投票システムとなりうる可能性もある（Girard 2012:17）。スパルタ人が模範とした美質は、「普段沈黙を守りながら、答えるに当たっては寸言をもって知恵を示すような言葉を吐けること」（太田 1970:98）であった。アテネとは異なり、言語によらない音を判断材料としていたスパルタの喝采の音量による選挙方法は、ロゴスよりも行動の厳格性を重視するいかにもスパルタらしい制度である。

4.6.ストア派のエピクテートスの拍手観

ストア派の哲学者エピクテートス（50年頃 －135年頃）は、『語録』において苦難の中にあって平静を保つことの重要性を説いているが、拍手に言及している箇所がある。まず、『語録』第1巻6章にはオリンピック競技にみる拍手の記述がある。「人生には、何か不愉快なことや困難なことが起こります。うん、しかしオリンピックでは起らないかね、諸君は暑さで弱りはしないか、雑踏（θορύβου）はしないか、風呂の加減は悪くないか。しかし私の思うに、諸君はそれらすべてをあの見る価値あるもの（オリンピック）と比較して、我慢し辛抱することだろう」（エピクテートス 1958:35）。雑踏と訳されたθορύβου は、騒音を含んだ拍手賞賛の意味であり、喧噪の含意があったことはすでに述べた。騒音としての拍手がオリンピックのために我慢すべきものと認識されている。拍手は否定はされず必要悪であるとされ、消極的にではあるが肯定されている。

同じ『語録』の第1巻29章には、拍手に対するエピクテートスの見解を示している記述がある。「自分が納得するだけでは満足ではないのか。子供らがやってきて拍手（κροτέω）をして「今日は農神祭おめでとうございます」という時、その子供らに対して、われわれは「そりゃめでたくない」というだろうか。決していわない。むしろ自分たちも一緒に拍手をするのだ。そこで君も、誰かに得心させて考えを変えさせることができぬ場合は、彼を子供だと思ってかれと一緒に手をたたくがいい。だがもしそれを好まないならば、結局黙ってい給え」（エピクテートス 1958:117）。エピクテートスは、儀礼として拍手することの価値は認めており、その意味では拍手を肯定している。エピクテートスにとって、拍手することは愚者のいうことに耳を傾けることと同義であった。拍手は他人にとっては快楽に対応する行為でありうる。しかし、それはあくまで他人事であるという認識である。そのうえで、快楽の提示に巻き込まれることなく平静さを保つことの重要性が説かれる。しかし、このときに拍手を聴き過ごすのではなく、拍手に心をかき乱されないように自ら他者に合わせて拍手した方が良いと述べられる。こうして拍手に対して距離をおいた態度が示される。

5.古代ローマの文献にみる拍手と手拍子

5.1.拍手と手拍子の諸相

古代ローマは古代史でも資料に恵まれた時代であり、拍手や手拍子についてもそこから多くの情報を得ることができる。例えば、ポンペイ出土の1世紀後半のフレスコ画には、カスタネットを鳴らして踊るプシュケを手を叩いて伴奏するエロスの姿が描かれている（フライシュハウアー 1985:124）など、演奏としての手拍子も存在した。しかし、拍手の歴史に古代ローマを位置づけるなら、賞賛としての拍手の記述が文献において飛躍的に増えた時代ということができる。

ポエニ戦争の頃の拍手の記述がある。ギリシア生まれの歴史家ポリュビオス（紀元前204年？-紀元前125年？）の『歴史』にはギリシア人の目に映ったカルタゴやローマの状況が描かれているが、第1巻44章には戦勝を喜ぶときの拍手の記述がある。紀元前221年カルタゴの司令官であったハンニバルがシチリアの都市リリュバエウムに応援に駆けつけたときの市内の人々の反応が、次のように記述される。「一方、市内の人々は、だれもかれも城壁の上に集まって、そこから事態の推移を不安げに見守っていたが、思いがけぬ展開に跳び上がらんばかりに喜び、拍手（κρότος）と大歓声で艦隊に応援を送った」（ポリュビオス 2013a:69）。戦勝の拍手歓呼が不安と対照されることによりリアルに描かれている。

ローマが秩序と繁栄を獲得する帝政初期の頃から、拍手についての多様な記述が見られるようになる。アウグストゥスの時代の詩人オウィディウス（紀元前43年-後

17年）の『変身物語』には次のようにある。4.735「（ペルセウスの勝利に対する）拍手（plausu）と歓呼が海辺にあふれ、空高い神々の宮居にまでとどいた」（オウィディウス（上）1984:173）。この一節では、広い空間に賞賛の拍手と歓呼が鳴り響いている光景が描かれている。11.17「どんな飛び道具も、オルペウスの歌声によって、無力にさせられたことだろう。が、すさまじい叫びと、口のまがったプリュギアの風の笛、太鼓や手拍子（plausus)、それに、バッコスの信女たちのわめき声が、竪琴の音をかき消した」(オウィディウス(下)1984:113)。この一節では、手拍子がうるさい音として描かれている。また、6.238「泥んこの掘割からおしゃべりな鷓鴣が見ていた。喝采(plausit)でもするかのように翼をうち振り、さえずりで喜びを表したのだが……」（オウィディウス（上）1984:318)。この一節から、鳥の羽ばたきのように手を素早く開閉させ叩き合わせる喝采がこの時代に存在したことが推察される。本稿のはじめに、速度（拍手の密度）の差異が拍手音の指標となることを述べたが、古代ローマにも、現在のように速い拍手が存在していたことになる。

プリニウス（後22/23〜後79）が自然界と人間との関わりについて記述した『博物誌』にも手を叩く行為の記述が数カ所ある。「とかくするうち、死んだように見えた兄の方が手を叩いて(plaudendo) 下男たちを呼び……(7巻57章)」(プリニウス 1986:332)。この一節では手を叩いて人を呼んでいる。「ある養魚池では、養殖されていない魚でも手を打つ（plausu）音を聞くと餌をもらいに集まって来る習慣をもっているし……（10巻89章)」(プリニウス 1986:471)。この一節では動物を集めるために手を叩いている。この他、手を叩く音や青銅ががらんがらん鳴る音にミツバチが引き寄せられて集まってくる（11巻22章)、夏雷に礼拝するために手を打つことはどの国でもしている（28巻5章)、などの記述がある。

ネロと同時代の文筆家であるペトロニウス（20年頃-66年）の小説『サテュリコン』には、トリマルキオンの饗宴で、奴隷が豪華な食材に拍手をしたとき、それに呼応して主人公が歓声をあげて料理にとりかかる場面が描かれている。36「ぼくらはみな、奴隷たちの始めた拍手（plaudo）に加わり、このひどく手のこんだ料理に歓声をあげてとりかかった」(ペトロニウス 1991:59)。奴隷が手を叩く行為と市民の歓声とが対比的に記述されているが、plaudo は手拍子にも拍手にもとれる。

ラテン語では、手を叩くは plaudere あるいは plausus であり、拍手のみならず手を使った賞賛のための複合的な方略で、音を立てガヤガヤさせる意味も持つ。他に applaudere も拍手の意味で使われる。なお、英語の acclamation は是認と賞賛の意味であるが、ラテン語の acclamatio は叫び声の意味であり賞賛にも批難にも使われる。

5.2.拍手歓呼の場と形式化

さて、古代ローマでは、どんな場所で手が叩かれていたのだろうか。まず、劇場ではいつも大きな拍手がされていた。プラウトゥス（紀元前254年-紀元前184年）の喜劇『カシナ』の前口上には次の記述がある。「（口上役、登場）ようこそ、高貴なる観客の皆さん。信義を何より重んじる皆さんを、信義の神様フィデスもことのほか慈しんでおられます。いまの言葉が本当なら、どうか盛大な拍手をお願いします。拍手をいただければ、芝居の初めから皆さんが公平な態度をお示しだと安心できますので。」（プラウトゥス 2001:5-6）。同書の脚注には「いまの言葉が……」以後の引用文はプラウトゥスの死後に演出家によって書かれたとあるが、いずれにせよ共和制ローマの初期には、拍手が劇を公平に評価する手段として認識されていたことがわかる。

法廷における裁判の場では、聴衆の拍手と歓呼が止むことがなかった。弁論の途中であっても、拍手と歓呼で賛意や賞賛が表明されたり、罵声で不支持が表明されることが頻繁にあった。笑い声も頻繁に生じ、法廷は終始騒々しい場であった。哲学者ルキウス・アンナエウス・セネカによると、弁護人もミスをすると聴衆から笑われた。不同意と敵意の表明はあからさまになされ、気に入らないものに対しては声を合わせて大声で罵りの言葉が浴びせられた。俳優が劇で言った台詞が繰り返されて罵られることもあった。聴衆はこうした状況の中での訴訟を好んでいたようだ（Bablitz 2010:133,134)。

では、ローマの法廷では、声を発して賞賛することと手を叩く賞賛はどんな関係にあったのか。バブリッツは、セネカやクインティリアヌスなどの文献において、声を表す laudare や laus、clamare や clamor の語の使用頻度が高いことから、法廷の弁論では拍手よりも言語による賞賛や罵倒が多かったのではないかと述べている（Bablitz 2010:134)。しかし、筆者は、聴衆の叫び声には当然ながら拍手も伴っていたと推察している。言語を

賞賛あるいは批難するのはあくまで言語であるとするバブリッツの見解はある程度の説得力は持つが、拍手による賞賛が、劇場や見世物イベントのみで完結していたとは考えにくい。

さて、ローマでは、共和制の時代から、人に対しても劇場での演技に対しても、立ち上がって拍手し声を揃えて歓声を挙げるという歓待の仕方があった（Aldrete 1999:104, Nicolet 1980）。共和制から帝政になると、この歓待の仕方は、執政官や皇帝に対する挨拶の仕方へと拡張した。こうした新たな習慣が定着するとともに、拍手や歓呼の新たなスタイルが生まれた。すなわち、身ぶり的反応を介在させた拍手と歓呼である。例えば、皇帝が現われると、立ち上がって拍手するのに加えて、ハンカチを振るジェスチュアが習慣化していく。歴史に例を拾うなら、3 世紀の皇帝ルキウス・ドミティウス・アウレリアヌスが、競技において拍手して手を振ることに代えてローマの人々にハンカチ（orarium）を与えたことが知られる（Dictionary of Greek and Roman Antiquities 1882:693）。同書によると、この行為は 19 世紀に帽子とハンカチを振るのと同じ意味を持つ。この他、劇場で、演劇の終了時に、主役の俳優が「Valete et plaudite！（さよならと拍手を）」と大声で叫ぶと、観衆が拍手と歓声により掛け合いの交唱のようにこれに応じていた。他方、法廷の場においては、聴衆が賛意や賞賛を意思表示するとき、手を開閉させたり、指を鳴らしたり、衣装トガの裾を波打たせて振ったりした。エジプトとメソポタミアの手拍子ですでに述べた二種類の打ち方を打ち分けることもあった。古代ローマにおける拍手は、こうして新たな習慣にとり込まれることにより独自のものへと転換していく。

5.3.執政官との謁見における拍手

ローマの拍手の特徴としてまず検討しなければならないのが、立ち上がって手を叩いて挨拶する行為である。共和制末期になると、執政官などが劇場や競技場に到着し民衆の前に姿を現すと、立ち上がって拍手し歓呼する行為が習慣となった。プルタルコス『対比列伝』には、執政官のポンペイウスが、劇場のなかで民衆に喝采されることを望んでいたとある（プルタルコス 1955:206）。この習慣は、帝政初期、アウグストゥスの時代になかば義務になり定着し（Fergus 1995:106）、ビザンティン時代に至るまで継続する（Cameron 1976）。

一般市民が皇帝を目にする機会は、劇場や円形競技場や戦車競技場（チルコ・マッシム）などで頻繁にあった。皇帝の帰還を路上の拍手歓呼で出迎えるアドヴェントゥス（adventus）の習慣も定着した。これらの機会を背景にした、公共施設において立ち上がって拍手歓呼する行為は、市民と皇帝とが直接コミュニケーションする場を形成した。市民は皇帝への拍手歓呼により政治に参加し、皇帝はその政策と行動の正しさを歓声の大きさによって確かめた。こうして帝政ローマにおける拍手を介在させた両者の相互依存関係が作られた。

皇帝が現れると立ち上がって拍手する習慣がローマ市民に浸透すると、皇帝の名前が触れ役により読み上げられたり示唆されるだけでも立ち上がって拍手喝采するようになった。スエトニウス（後 70 年頃〜140 年頃）『ローマ皇帝伝』の「アウグストゥス」によると、「彼（アウグストゥス）が芝居を見物していたとき、ある喜劇俳優が「おお、公正にして善良な主君よ」と台詞を発するや、アウグストゥスのことではなかったにもかかわらず観客が一斉に立ち上がり拍手喝采した」（スエトニウス 1986a:150）。この拍手喝采の形式は皇帝の親族に対しても実施されることがあった。例えば、「（アウグストゥスは）彼ら（息子）がまだ子供であった折、劇場に入ると客が皆一斉に立ち上がり，立ったまま拍手喝采した」（スエトニウス 1986a:153）。執政官や皇帝は、こうした拍手を聴いて親族や側近の人気を知りそれを自らへの拍手と比べていた。

皇帝自らが拍手を始めた例もある。ネロを統治の手本にしようとした皇帝ウィテリウスは、「儀式としての宴会では、お気に入りの竪琴奏者に、公然と「主君の歌集の中から何か歌え」と勧めた。ネロの作った独唱歌をうたい始めると、ウィテリウスは、まっ先に立ち上がって拍手すらしたものだ」（スエトニウス 1986b:254）。他方、この慣習は市民にとって脅威にもなった。『ローマ皇帝伝』の「カリグラ」には次の一節がある。「剣闘士試合を催していた日に、戦車剣闘士ポリウスが幸運な試合の後、自分の奴隷を解放してやり、観客から熱烈な拍手喝采を受けた。するとカリグラは、見物席を猛烈な勢いで走って降り、自分の市民服の裾を踏みつけ、階段をまっ逆様にころがり落ちた、憤懣やるかたなく、こう叫びつつ、「人類の主人たるローマ人が、こんな些細なことから、あんな剣闘士風情に、神格化された元首たちより、いや目の前の私よりも、大きい名誉を与えてやるとは」と」

（スエトニウス 1986b:50）。記述に誇張があるかもしれないが、初期の皇帝たちが拍手喝采を強く求めていたことがわかる。他方、皇帝ウェスパシアヌスは慣習に従わない行為にも寛大であった。「デメトリウスは、追放を宣告された後、旅の途中でウェスパシアヌスと出会い、無礼にも起立せず挨拶もせず＜中略＞それどころか、何かわけのわからぬことを口汚くわめいたが、ウェスパシアヌスは「犬」と呼んで満足した」（スエトニウス 1986b：281）。

拍手喝采による市民の意思表示に応じるために、彼らを前にした皇帝の演説は、雄弁術とともに身ぶり手振りを伴うものになった。観衆はそれに拍手と歓呼で応じた。ここで、拍手はさておき、歓呼の声はどのようにかけられていたのだろう。オクシュリュンコス・パピルスの写本の中に、皇帝ティベリウスの養子であるゲルマニクスが紀元 18-19 年にエジプトのアレクサンドリアに滞在したときの演説のパピルス写本があり、英訳を読むことができる（Sherk 1988:60-61, Aldrete 1999:116）[11]。パピルスにはゲルマニクスの演説に加えて、聴衆の歓呼も記されている。ゲルマニクスの演説がアレクサンドリアの市民に話が及ぶと、“Hurrah, lord, good luck! You will receive much good luck!”[12] と声が掛かった。ゲルマニクスは、聴衆にあまり興奮しないように求め演説を続けるが、“Good luck!”と掛かった。そしてアレクサンドリアの豪華さと歴史、皇帝の喜捨を讃えると、“Live on a longer life!”と掛かった。誰が歓呼したのかは不明である。異なるグループが掛けていたかもしれず、典型的な声を記しただけかもしれない。ユニゾンであったのかもわからない。しかし、このとき二手に分かれた掛け合いが存在したはずだと、ウィスコンシン大学のアルドリートは指摘している（Aldrete 1999: 117-118）。アルドリートによれば、こうした掛け合いは、皇帝が市民に演説するときに頻繁に生じるものであった。それは音楽の呼べるものではないが、リズムを伴うやりとりが作られていた（Aldrete 1999:128）。

5.4.拍手歓呼と嘆願

市民による拍手歓呼のもうひとつの役割は、意思表示と嘆願であった。競技場や劇場では、皇帝に対して嘆願や不満も表明された。カッシウス・ディオ（155-235）の『ローマ史』75.4 には、賞賛の歓呼に嘆願が挿入された出来事が書かれている（Dio 1927:203-205）。戦争に明け暮れる皇帝セプティミウス・セウェルスの治世下で民衆が疲弊していた 196 年の農神祭前のある日、円形競技場で馬術競技を観ていた大観衆は、競技の途中で、突然静かになるように互いを促した。競技場が静まりかえると今度は一斉に拍手をし始めた。そして幸運を願うお決まりの歓呼を発し、続いて、「女王」と「不滅」の歓呼を発し、ローマを讃えた。しかし、ディオによると、ここから通常の嘆願の歓呼ではなくなる。大観衆は、「どれほど長くこの不幸（災難）を被らねばならないか」「どれだけ長く戦争を行なわねばならないか」と叫び声をあげた。そして続けざまに「もうたくさんだ」と叫んだ。それらを叫び終えると、大観衆はまたもとどおり競技に注意を向けた。

この光景を目撃したディオは、数千人が一斉に嘆願の声を発したことに驚き、それを訓練された合唱に擬えている。ディオはこの事件を偶然の出来事と記しているが、アルドリートは、これを計画された皇帝批判であり、批判の言葉を準備したグループがいたはずだと述べている（Aldrete 1999:126）。筆者も、沈黙をはさんだ拍手が、観衆の一致団結を促す合図であったと考えたい。数千人の大観衆が入ることができる円形競技場であったことも見逃せない。円形競技場の大観衆が一斉に嘆願の声をあげれば、皇帝といえども制御することはできない。こうした行動が可能になるためには、偶然であっても画策されたものであっても、大観衆の感情と行動が一丸とならねばならない。そのために効果的であるのは、嘆願の言葉が、誉め詞であっても批難であっても、よく知られている決まり文句、あるいは反復に耐える言葉であることである（Aldrete 1999:126）。そして、こうした行動がとられた結果、大観衆の全員でなくとも、実質的な多数者の感情と意思が、市民のオピニオンとして皇帝に伝わることになる。こうした組織化された拍手喝采を介在させた市民の意思表示は、古代ローマの特徴である。

5.5.クラック

ここまで述べたように、ローマでは、劇場でも法廷でも、弁舌と拍手喝采とが対話的に相互作用することが頻繁にあった。しかし、この特徴にも関わらず、これから述べるように、拍手喝采そのものが批判に曝されることがあるのは、クラック（Claque）の存在による。クラックとは、演劇の舞台において、特定の俳優の演技などを成功（時には失敗）に導く目的で客席から賛辞（や野次）

を送る集団のことである[13]。クラックの活動の場は主として法廷や劇場であるが、執政官や皇帝が拍手と歓呼の大きさに執着したとすれば、クラックを使わない手はなかった。クラックは、政治史の中にも現れることがある。アッピアノス(後 95-165)の『ローマ史』によると、紀元前 44 年 3 月 15 日、ブルータスとカッシアスがカエサルをポンペイウス回廊で殺害したすぐあとにクラックが歓呼をあげることが仕組まれていた。クラックには多額の金銭が使われていたが効果がなく、大勢の市民がポンペイウス回廊に入ってきて、逆にこの歓声が目論まれたものであることが露見してしまった[14]。

紀元前 2 世紀にプラウトゥスの喜劇『アンピトルオ』にクラックの記述がある。65-85「観客監視人は客席一つずつ全座席を見て回り、もし誰かに送り込まれたサクラを発見したら、観客席で上着のトガという証拠を取っておくこと。＜中略＞役者にも監視をつけておき、サクラが拍手するように言いつけておいた役者や、他の役者が失敗するのを喜ぶような役者がいたら……」(プラウトゥス 2000:11-12)。あくまで物語であるが、大掛かりなクラックが蔓延っているようすが描かれている。タキトゥス『年代記』のティベリウスには 1.16「この屯営には、ペルケンニウスという兵がいた。以前は雇われ喝采団の御大をしていた。やがて一兵卒となってからも、口達者であり、群衆の俳優びいきの心理に訴えて煽動するのが巧みであった」(タキトゥス 1981b:33)とある。引用文中の「喝采団」についてはネロの節で述べるが、ティベリウスの治世の初期（14 年）に、すでに存在したことがわかる。他方、法廷では見物人の声援は記録されたが、見物人にはクラックが含まれることが多く、弁護士から金銭が支払われた（Bablitz 2010:122,128)。こうして法廷は、雇われたクラックの賞賛とそうでない人々の音声が入り乱れ大音声がずっと続いていた（Bablitz 2010:135)。

5.6.キケロのクラック批判

ローマの代表的な弁論家で政治家でもあったキケロは法廷におけるクラックを痛烈に批判している。キケロは『弁論家について』で良い弁論とはどんな弁論であるかを次のように述べる。53「どのような人に人は喝采を送るのであろうか。＜中略＞明確に語る人、分明に語る人、言葉の点でも内容の点でも光輝をもって語り、言論そのものにおいてある種の言わば律動のある詩を創り上げる人−すなわち、わたしの言う、詞藻を凝らして語る人がそれである」(キケロ 2005:140)。キケロの雄弁は、言葉を手段として自らの信条を市民に説得しそれを政治的行為に結晶させるものであり、拍手歓呼はその実現のために有効な手段であった。その意味で、キケロは、市民に迎合せずに世界の意味をロゴスの導くままに模索してゆくプラトン（の拍手観）とは、異なる拍手観を持っていたということができる（藤田 1983）。

しかし、現実のローマ法廷での拍手は、キケロが意図した理想的なありようではなかった。キケロの『セスティウス弁護』には、まず、ローマ市民の国政への関心について次のように書かれている。106「ローマ国民の国政に関する見解と願望は三カ所ではっきりと知ることができる。市民集会が行われる広場、種々の民会の議場、そして競技会や剣闘士の試合が行なわれる際に人が集まる競技場だ」(キケロ 2001:295)。さらに、法廷での拍手歓呼と見世物を提供する劇場での拍手や罵声とが変わりがないものであることが述べられる。117「(見世物が提供された劇場では）まず、元老院決議を耳にすると、法案提出の事実、およびその場にはいない元老院議員たちに全員から拍手が沸き起こった。次に、元老院から退場して見世物を見に来た各議員に対して喝采が起こった。だが、この見世物を提供した執政官（スピンテール）が席に着くと、人々は立ち上がり、手を伸ばして感謝し、喜びの涙を流しながら、私（キケロ）への行為と同情を示した。しかし、あの錯乱した精神に駆り立てられた狂人クローディウスが到着すると＜中略＞全員が声を張り上げ、手のひらを差し出して威嚇し、悪意に満ちた罵声を浴びせかけた」(キケロ 2001:302)。劇場でも法廷でも、拍手歓呼のみならず激しい罵声が飛び交っていたことが読み取れる。

キケロは、こうした状況で生じがちなクラックを批判しつつ、それを必要とする人々について次のように述べる。115「演劇や剣闘士競技に人々が参集するところでも、何人かのお調子者が金で雇われて、貧弱でバラバラの拍手に景気をつけるのが普通だと言われている。だが、そうなった時、どのようにして誰から始まったのか、健全な聴衆は何をしていたのか、一目瞭然である。どうして私は今日諸君に、どのような人物、いかなる類の市民たちが最も拍手を受けるのかを語る必要があろうか。＜中略＞とりあえず拍手など些細なことだと考えてみたまえ。仮に些細なことだとしても、それは立派な人物にとって些細なことなのであって、非常に微々たることが死活問

題となる者たち、すなわち噂や、彼ら自身も言っているように民衆の人気によって行動を支配されている者たちにとっては、拍手というものは不滅の価値を持つものであり、同時に蛇のように音をたてて迫りくる破滅を意味すると思われるのは必然の成り行きである」（キケロ 2001:301-302)。ローマには人気によって行動を支配される人々が多いため、クラックが横行してしまい、時と場所に適合的でない拍手が増えることになった。しかし、キケロが述べるように、雄弁というものが、時と場所に応じた状況的なものであるとすれば、状況に相応しい拍手というものが見つかるはずであり、拍手はそこで一定の役割をもつはずである。キケロのこうしたクラック批判を考慮したうえで、再びそれをプラトンと比較してみると、両者は状況の捉え方に違いはあるが、弁論の場においてともに聴き手を選んでいるという点では両者は呉越同舟であるということができる。

5.7.拍手歓呼の場とクラック

プリニウスの『書簡集』2.14.4-8 にもクラックの記載がある（Plini 1969：127)。プリニウスによると、当時の法廷では、あからさまに金銭が介在する拍手歓呼が横行していた。とくに、「晩餐のクラッカー（Laudiceni)」と呼ばれるクラッカーたちは、晩餐（金銭）を目当てに法廷を次から次へと拍手し回っていた。プリニウスによると、彼らは大勢で観客の中に潜り込み、観客による拍手歓呼を意のままにしようとした。クラッカーのリーダーが合図すると、彼らは一斉に拍手歓呼を始める。クラッカーはそれがあたかも自然発生しているようにタイミングを図る技術を習得していた。拍手のみならず、彼らは野次を扇動する役割も担った。いずれにせよ、晩餐のクラッカーたちは、弁論を聴いておらず、合図で拍手したり野次をとばすことに集中した。ここで、法廷における、クラックの介在による拍手歓呼の状況を模式的に述べるなら、拍手歓呼によって弁論が中断され、静かになると、また弁論が始まり、ふたたび拍手歓呼で中断する。法廷はこの繰り返しであった（Plini 1969：129)。こうして、演劇起源のクラックが法廷においても活動を始め、さらに政治のなかに入っていきネロの時代を迎える。ネロの大掛かりなクラックについては後述するが、組織化されたクラックは 7 世紀のビザンチン時代まで及んでいる（Cameron 1976:244-70)。ビザンチンの年代記 “Chronicon Paschale” には、7 世紀の東ローマ皇帝ヘラクレイオスは、アヴァール王との交渉の際、複雑な喝采の儀礼を見せつけて怯えさせようと、プロのクラック団を引き連れて行ったと書かれている(Cameron 1976: 257)。

ここまでの検討から、ローマにおける拍手と歓呼の関係とクラックの介在を次のように概括できる。

拍手歓呼の場	対象	比重	クラック
執政官謁見	登場	拍手＞歓呼	大
競技場	技能	拍手＋歓呼	小
劇場	演技	拍手＋歓呼	大
法廷	弁論	拍手＜歓呼	大

5.8.ネロの喝采団

ローマの代表的なクラックが、皇帝ネロによる喝采団である。ネロ（紀元 37 年-紀元 68 年）の時代から、遊歴のキタラ奏者や歌手が、ローマで舞台に立つようになる。観客は、名人芸を披瀝したキタラの演奏家や歌手に対しては、熱狂的に拍手喝采したが、不正確な演奏や歌唱に対しては容赦なく批難した。タキトゥスやスエトニウスによれば、自ら竪琴キタラの歌をたしなんだ皇帝ネロは、公衆とプロの音楽家の前で歌唱を競い彼自身の歌を賞賛させた。スエトニウスによれば、ネロの声量は乏しくしわがれ声であったが、声量を保つために錬磨を怠らなかった（スエトニウス 1986 b:152)。紀元 60 年ネロは、4 年に 1 度開かれるオリンピュア体育祭に対抗し、5 年に 1 度開かれるネロ祭を創設し、歌を競技種目にした。ネロ祭は、首都ローマの公共施設のほとんどすべてを使った大イベントとなった。ネロは自ら競技に出場し、拍手による賞賛を観衆に強く求め、自らに向けられた拍手に陶酔した。

ネロが公衆の前に歌手として姿を現したのは、まず、皇帝になって 10 年目である紀元 64 年ナポリの野外劇場においてである。ネロはそれまでは皇宮内で演奏していたが、自らの歌の演奏能力を市民の評価にゆだねようとする気持ちが抑えられなくなった。このときネロは皇帝としてではなく、地味な服装で出場して喝采を浴びた。ネロは公衆による評価に決して無防備であったわけではなかった。ネロは配下の大勢の兵士に拍手をもって彼の歌を賞賛させた。

ネロは、アレクサンドリアへの旅行のときエジプトの拍手の音作りに感動し、ローマ式の拍手にそれをとり入れて、ネロを賞賛するための大掛かりなクラックを組成

した。スエトニウスによれば、「ネロは、アレクサンドリアから、最近着いた旅客船でナポリに流れ込んでいた人たちが、調子をとって拍手喝采するのにすっかり魅せられて、アレクサンドリアから大勢を呼び寄せた。これに満足せず、ネロは騎士階級の青年と、平民の屈強な若者を五千人以上も、各地から選り抜き、彼らを組に分けて、いろいろの拍手の仕方ー「蜂ぶんぶん（bombos）」と「空洞瓦（testas vocabant）」と「煉瓦（imbrices）」と呼ばれていたーを学ばせ、そしてネロが歌っている最中、応援させた。彼らは、ふさふさとした豊かな髪と、非常にあかぬけした衣装と、指輪をつけない、むきだしの左手とで人目を引いた。各組の御大は、それぞれ四十万ステルティウスの年俸を貰っていた」（スエトニウス 1986b:153）。タキトゥス（後 55 年頃〜120 年頃）によると、「とうとうネロは舞台に登って、慎重に竪琴を弾じ、歌の教師に助けられながら、声の小手調べをやった。護衛隊の兵士や百人隊長も副官もこれを聞きに押しかけていた。ブッルスも心を痛めながら拍手を送る。騎士階級から「アウグストゥス団」と呼ばれる喝采団をつのったのもこのときが初めてである。団員はみな、若さと意気で人目をひく者ばかりで、一部は生れつきの鉄面皮から、元首のしぐさや声を神々の名で持ちあげた」（タキトゥス 1981b:187）。ディオの『ローマ史』にも同様の記述がある（Dio 1925:81）。

スエトニウスが記している「蜂」「空洞瓦」「煉瓦」は、拍手音の描写であり、そこで音による拍手の違いが認識されていたことは間違いない。どんな拍手であるかは確認できないが、「煉瓦」「空洞瓦」は手の形であると思われる。「煉瓦」は手を丸めて空気を入れて工事中の凹面の屋根煉瓦のようにした打ち方、「空洞瓦」は手のひらを平にして瓦のように固くする打ち方である。これらの二種類の打ち方は、エジプトとメソポタミアの手拍子ですでに述べた二種類ともほぼ対応しているが、スエトニウスの文は、物に擬えて記述しているので、具体的に再現することができる。これらの音響の差異に近い拍手現象を現代に探すなら、今日のスペインにみられる「ひそやかな拍手 parmas sordas」（＝煉瓦）と「輝かしい拍手 parmas brillantes」（＝空洞瓦）であろう。他方、「蜂」は、従来より、拍手ではなく蜂の大群のような騒音を発するハミングの音であるとする解釈が多い。しかし、蜂のみが声であるとする解釈は不自然であると筆者は考えている。事実、集合拍手音を用いて蜂の大群のような音を発することは可能である。加えて、筆者は、現代の演奏会において、雨音を切り裂く落雷音のように同期と非同期を周期的に繰り返していく集合拍手音なども確認している。「蜂」に関しては、それらの検討を踏まえて新たな知見を提示したいと思っている。本題に戻ると、「空洞瓦」「煉瓦」は手の形状、「蜂」は集合拍手音としての拍手の音響の記述であると推察される。

推察の妥当性はさておき、ネロが集めた 5000 人の喝采団は、組ごとに別々の衣装を身につけ、三種類の音を組み合わせて拍手音を組織化し、ネロが求める賞賛を作り出した。彼らが訓練され多額の報酬が与えられたプロの集団であることが見落とされてはならない。彼らの拍手技術に及ばないまでも組織化された拍手に加わろうとした一般市民も、そこにはいたはずである。それらの拍手音が加わった結果、競技会では壮絶な音響世界が作られたと考えられる。

ネロは、翌 65 年のローマのネロ祭で、自作の詩を曲に合わせて歌う競技に出場した。このとき元老院は、ネロを優勝者にすることをあらかじめ決議していたが、ネロはこれを拒絶し、他の出場者たちと対等な立場で競い合うつもりだと言明した。ローマ市民は、皇帝が歌うことに好奇心を刺戟されてポンペイウス劇場に押し寄せた。ネロはここでも大きな喝采を浴びたが、歌い終わって審判たちの判定を待つときも、他の出場者と同じように謙虚に待ったとある。「競技の最中ネロは、競技規定をたいそう忠実に守り、咳払いはしなかったし、額の汗は腕で拭っていた。」（スエトニウス 1986:158）。元老院の議員たちはなす術がなかった。

ネロは、儀礼としての拍手ではなく、自らの演奏に対する実質的な評価としての拍手を強く求めていた。それは、ネロが、静かに聴くことを望んだこと、歌が終った後の拍手を望んだことからわかる。そしてそのことは、ネロのみならず、ローマの多くの公衆が望んだことでもある。

次のネロ祭の記述から、当時の拍手に巧拙の違いがあることが認識されていたことがわかる。タキトゥスによると、「さすがは、都の大衆だ。日ごろから黙劇俳優の演技にも声援を送っていただけに、このときも、調子の整った、規則正しい拍手を鳴り響かせる。＜中略＞しかし、イタリアの辺鄙な自治町から見物に来ていた人は、古風な習慣をまだとどめていて真面目である。遠い属州から、使節の役目やら個人の用やらで訪れていた人々も、およ

そ放縦な生活とは縁がない。＜中略＞彼らの不慣れな手は、拍手で疲れ、熟練した喝采屋を混乱させるので、たびたび兵隊から鞭でたたかれる。兵どもは階段座席に立っていて、客の調子はずれの拍手や怠慢な拱手傍観を、一瞬といえども許さなかった」（タキトゥス 1981b：305）。ローマの大衆の熟練した巧い拍手と田舎者の不慣れな拍手が区別されて認識されていた。拍手は演奏の一部でこそなかったが、技術があり熟練があり、それらがどのような効果を持つかが多くの市民に知られていた。

ネロは67年には、ギリシアを訪れたが、属州観察のためではなく、コリントやオリンピアでの競技に出場するためである。「アウグストゥス団」もかれに同行する。これらの競技会も４年ごとの開催であったが、ネロの命令によりこの年に開催された。オリンピュア祭にも歌の競技が導入された。ネロはすべての競技で喝采を浴び優勝した。スエトニウスは、競技を終えた後のローマで喝采団の一行が凱旋し、「アウグストスの従者だ。われわれは彼の凱旋兵だ」と叫んだと書いている（スエトニウス 1986：161）。ネロの喝采団は、熱しやすく好奇心が強いローマ人気質とネロの拍手への陶酔とが相乗されて形成された、他に例を見ない集合拍手音の組織化である。これまで注目されなかったその実体をスエトニウスの記述から垣間みることができる[15]。

6.旧約聖書にみる拍手

6.1.讃美の拍手

旧約聖書には手を打つ記述がいくつかある。筆者はヘブライ語聖書の記述をあたっていないが日本語訳と英訳とを手がかりに拾いだしてみる。

『列王記下』の11章12には「そこでエホヤダは王の子をつれ出して冠をいただかせ、律法の書を渡し、彼を王と宣言して油を注いだので、人々は手を打って「王万歳」と言った」とある。南ユダ王国で祭司エホヤダがヨアシが七歳になったときにクーデターを起こして、王の就任式を神の前で行い政権をダビデ家に戻す。拍手は王の就任を讃美する喜びの表現として打たれる。『詩篇』47篇1には、聖歌隊の指揮者によってうたわせたコラの子の歌として、「もろもろの民よ、手をうち喜びの声をあげ、神にむかって叫べ」とある。手を叩くことは、喜びと讃美の表現であり、声を出すと手を叩くことが同等の重みで描かれている。人がだれしも喜びの表現として自然に拍手することが述べられるが、拍手者を特定していない。今日のキリスト教で、礼拝のなかの拍手の是非をめぐる議論がなされるとき、拍手を禁じず、喜びの自然発露としてそれが肯定的に述べられるときにはこの箇所がよく引き合いに出されているようだ。『詩篇』98篇7-8には、「海とその中に満ちるもの、世界とそのうちに住む者とは鳴りどよめけ。大水はその手を打ち、もろもろの山は共に主のみ前に喜び歌え」とある。海もしくは川が手を叩くという擬人的な拍手の表現である。想像上の音響が記述されているが、拍手は喜びと賞賛の表現である。海や川の水が手を叩くとは聴覚に加えて視覚にも訴える拍手の記述である。『イザヤ書』55章12には、「あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。山と丘とはあなたの前に声を放って喜び歌い、野にある木はみな手を打つ」とある。拍手対象は直接的には神ではなくユダの民であるが、間接的に神への讃美と喜びの表現になっている。多数の木によって打たれる想像上の拍手であるが音を想像できない。拍手の視覚的な認識である。

6.2.嘲りの拍手

旧約聖書には、罵りやブーイングの表現として手が打たれている箇所がある。『民数記』24章10には「そこでバラクはバラムにむかって怒りを発し、手を打ち鳴らした。そしてバラクはバラムに言った、「敵をのろうために招いたのに、あなたはかえって三度までも彼らを祝福した」とある。不満もしくは憤りの表現として手を打っている。『哀歌』2章15には「すべて道行く人は、あなたにむかって手を打ち、エルサレムの娘にむかって、あざ笑い、かつ頭を振って言う、「麗しさのきわみ、全地の喜びととなえられた町はこれなのか」と」とある。『哀歌』はエルサレム陥落の嘆きの歌であるが、手を打つことは嘲りの表現である。『エゼキエル書』は神がエルサレムを滅ぼす預言であるが、嘆きや怒りの表現として手を打つ箇所がいくつかある。6章11には、「主なる神はこう言われる、「あなたは（エゼキエル）手を打ち、足を踏みならして言え。ああ、イスラエルの家のすべての悪しき憎むべき者はわざわいだ」とある。手を打つことは嘆きと悲しみの表現である。21章14には、「それゆえ、人の子（エゼキエル）よ、あなたは預言し、手を打ちならせ。つるぎを二度も三度も臨ませよ。これは人を殺すつるぎ」とある。ここでも手を打つことは嘆きと悲しみの表現であるが、それは神が剣をエルサレムに臨ませることの預言である。21章17には、「わたし（神）もまた、わたし

の手を打ちならし、わたしの怒りをしずめると、主なるわたしは言った」とある。怒りの表現として神自身が手を打っている。25 章 6-7 には、アンモン人のイスラエルへの嘲りに対して、「主なる神はこう言われる、あなた（アンモン人）はイスラエルの地に向かって手をうち、足を踏み、心に悪意を満たして喜んだ。それゆえ、見よ、わたしはわが手をあなたに向けて伸べ、あなたを、もろもろの国民に渡して略奪にあわせ、あなたを、もろもろの民の中から断ち、諸国の中から滅ぼし絶やす」とある。手を打つことは足を踏み鳴らすことと同様、嘲笑的な歓喜または喜びまたは勝利を暗示しており、イスラエルに手を打って嘲笑したことへの報復としてアンモン人が滅ぼされるだろうとある。『ナムホ書』はアッシリアの滅亡を預言した書であるが、3 章 19 には「あなた（アッシリアの王）の破れは、いえることがなく、あなたの傷は重い。あなたのうわさを聞く者は皆、あなたの事について手を打つ。あなたの悪を常に身に受けなかったような者が、だれひとりあるか」とある。アッシリアへの嘲笑あるいは憤りとして手を打っている。『ヨブ記』27 章 23 には、「それ（東風もしくは恐ろしいこと）は彼に向かって手を鳴らし、あざけり笑って、その所から出て行かせる」とある。手を打つことは、強い嘲笑の意味、もしくは強い風を向わせる意味である。『ヨブ記』34 章 37 には、「彼（ヨブ）は自分の罪に、とがを加え、われわれの中にあって手をうち、神に逆らって、その言葉をしげくする」とある。手を打つことは、神の仕打ちに対する憤り、もしくは神への言い開きである。

以上のように、旧約聖書では手がさまざまな意味で打たれている。賞賛、喜びの表現として手が打たれることもあるが、嘲笑、憤り、嘆きと悲しみの表現として手を打つことも多い。他に、木々や海が手を打ち、怒りとして神自身も手を打っている。

他方、旧約聖書には、手を打つことが、保証人になることを意味する箇所がある。『箴言』6 章 1 には、「わが子よ、あなたがもし隣り人のために保証人となり、他人のために手を打って誓ったならば」とある。『箴言』17 章 18 には、「知恵のない人は手を打って、その隣り人の前で保証をする」とある。『箴言』22 章 26 には、「あなたは人と手を打つ者となってはならない、人の負債の保証をしてはならない」とある。手を打つことの意味は、日本における「手打ち」、西アフリカにおける「合意」の意味に近い。

7.旧約以後の宗教における拍手の認識

7.1 キリスト教

キリスト教が広く普及しはじめると、劇場における拍手の習慣が教会にも影響した。しかし、教会における拍手の是非は、初期キリスト教では見解が分かれていた。カエサレアのエウセビオス（263 年頃-339 年）が編纂した『教会史』第 8 巻 30 章「パウロを告発した監督たちの書簡（269 年以後）」には次のようにある。「また彼（サモサタのパウロ）は手でひざを打ち、審判の座を足で踏みならします。そして彼の仲間である騒々しい男や女たちは、劇場でのように拍手したり、ハンカチをふったり、大声をあげたり、飛び上がったりしますが、中にはそうはせずに神の家でのようにうやうやしい態度で静粛に聞くものがいれば、彼は［その者たちを］咎めたり、軽蔑したりします。」（エウセビオス 2010:155）。3 世紀には教会で拍手歓声が好まれることがあったことが確認できるが、4 世紀になると、コンスタンティノポリス総主教のクリュソストモスは、教会では音をたてずに聴かねばならないとし、劇場と同じように拍手したり声で賞賛することを戒めている（Kelly 1995:130,131）。以後、賛否両論はあるがキリスト教の教会における拍手は一般的には望ましくない行為であると認識されている。

7.2.イスラム教

イスラム教では手を叩く認識はどうか。クルアーンには手を叩くことを記述している箇所が一カ所ある。8 章の戦利品（アル・アンファール）の 35 節である。「聖殿での彼らの礼拝といえば、ただやたらに口をならし手を拍（たた）くだけのこと。さ、汝ら、充分天罰を味わうがよい、今まで無信仰にふけって来た報いとして」（井筒俊彦訳 242）。拍手はここでアッラーを信仰しない人々の行為であり批難されるべき行為として描かれている。現在のイスラム教徒の礼拝のなかに手を叩く行為はみられない。

8.おわりに

本稿は、拍手の起源について西洋古代史を中心に検討した。まず、拍手が本能的なものであるかを乳児と霊長類の手を叩く行動から検討した、次に、古代オリエントの考古学資料にみる手拍子を概観した。次に、古代ギリシアの文献にもとづき、プラトンの美学にみる拍手の認

識、ストア派の拍手観、スパルタのアクラマチオによる選挙について述べた。次に、ローマ史の文献にもとづき、執政官との謁見での拍手、キケロのクラック批判、ネロの喝采団を検討した。最後に、旧約聖書に記述される拍手について述べた。本稿のはじめに述べた手を叩くときの音の指標に関して、検討により次のことが示唆された。

- 拍手の速度（密度）：高速で鳥の羽ばたきのように打たれる拍手がある（古代ローマ）。
- 拍手の音色：空洞にした打ち方と手のひらで打つ打ち方が打ち分けられている（古代オリエント、ネロの時代）。
- 拍手と歓呼の比重：執政官謁見では拍手の比重が歓声より大きく、法廷では歓声の比重が拍手より大きい（古代ローマ）。

拍手は人や社会を動かす力となりうるものである。市民は皇帝への拍手歓呼の場で、自らの意思表示をした。また、ソフィストの論争やローマの弁論では、拍手歓声が勝敗に影響することがあった。他方、手を叩く行為がそのまま音楽の実践になることもある。エジプトの手拍子が、単純なリズムと複雑なリズムを叩き分けることができたとすれば、それを音楽の演奏とみなすことができる。かつて筆者は、音楽と言語の境界について、動物の音声コミュニケーションの観点から検討し、反復して音を発する行為が自己目的化していくのかをその分岐点として論じたことがある（矢向 2008）。古代オリエントにおける手拍子には、歌や舞踊の伴奏から離れた、手を叩くことの自己目的化が見出せるものがある。他方、賞賛する拍手は、そのままでは音楽ではないが、これも音楽に転換しうる性質を持っている。ローマの拍手歓呼にみる掛け合にはリズムがあると考えられるし、ネロの喝采団では三種類の集合拍手の音色が叩き分けられる。これらは音楽となる性質を含み持つものである。

本稿の検討を踏まえた今後の課題を二点述べておく。まず、競技場や劇場において賞賛として打たれる拍手には、結果の報酬としての拍手のほか、期待あるいは予想として打たれる拍手もあったはずである。本稿でとりあげた史料にも、予想としての拍手を示唆する例はあったが、直接の手がかりがなかった。今後は、現代の演奏会やスポーツにみる拍手喝采を考慮したうえでそれを検討する必要がある。次に、本稿の冒頭で、拍手が作り出す音は騒音であり円滑なコミュニケーションにとっては妨げになる場合があると述べておいた。プラトンの『国家』や旧約聖書に見られる憤りや否認としての拍手は、拍手のこのアンチノミーに対応づけられる例かもしれない。しかし、本稿でとりあげた拍手をはじめ、今日の大多数の拍手は、賞賛し承認するために打たれている拍手である。騒音を発しながら親密さを作るという拍手のもうひとつの本性をどう考えていくかについては、対応する実例を増やしたうえ稿を改めたいと考えている。

本稿は、拍手を西洋古代史の資料から検討したが、筆者は、日本やアジアの拍手、近現代の拍手についても情報を集めている。それらは稿を改めるが、本稿はそれら一連の拍手研究の出発点になるものである。

注

1) モリスによると、ジェスチュアには、見ただけですぐ意味がわかるジェスチュアと、地域差がありそれぞれ意味が異なるジェスチュアとがある。前者は食べ物を口に入れる真似で空腹を示すなどのジェスチュアで、起源が一箇所とは考えにくい。後者は、指先をすぼめるなどのジェスチュアで、特定地域で生じ他の地域に広がったものが多いと考えられている（モリス 2004）。
2) モリスは手を叩き音を発するコミュニケーションについて記述していないわけではない。『ふれあい』には、拍手の攻撃性と、裏腹の親密さを求める性質についての言及がある（モリス 1974）。
3) Waving, Clapping and Pointing
<http://www.whattoexpect.com/first-year/wave-clap/>
<http://www.toy4baby.com/unchiku/month_development.html#01>
<http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11171100536>（2015 年 10 月 31 日取得）
4) 引用文前の 11 はテキストの段落番号である。以下も同様。
5) 引用文献はすべて日本語訳もしくは比較的容易に入手できる英訳がある古代ギリシア及びローマの書物である。筆者はギリシア語の文法に不案内であるが、引用文中で手を打つことに言及がある箇所では対応するギリシア語の単語を記した。引用文中の括弧は筆者による付記である。
6) ピラミッドの墓室壁面に刻まれた「ピラミッド・テキスト」の中には、482「ペーの精霊たち、汝のため（棒を）うちあわせ、体をうち叩く。かれら、汝のため手をうちならし、側髪を引張る」（杉 1978:594）という文がある。演奏に対してではないが、賞賛のために手が打たれている。
7) この他、例えば、オリンピアには、出場選手の呼び出しや紹介をする触れ役たちと、ラッパの吹き手たちとが、声音の大きさを競う競技があった。
8) 本稿では歴史書のみならず、物語に記される拍手もとりあげている。物語の拍手は現実ではないが、執筆された時期に拍手がどう認識されていたかを知ることができる。
9) クセノポンの『シュンポシオン』は『饗宴』として訳されているが、プラトンの『饗宴』とは別の書物である。
10) 拍手喝采による選挙を支持する 20 世紀の言説に、カール・シュミットが『現代議会主義の精神史的状況』（1923 年）の中で述べた「国民がなんらかのしかたで「喝采」するのであろうと、国民意思は、当然つねに、国民意思である。」（シュミット 2015:24）がある。シュミットは、スパルタの選挙には言及していないが、民主主義は国民の歓喜と拍手喝采によって担われるべきだと主張し、ナチスを擁護し、議会制を否定した。

11）ゲルマニクスのアレクサンドリア滞在については、スエトニウスにも記述がある（スエトニウス 1986a：279）。
12）歓呼はシャークによる英訳である（Sherk 1988：60）。
13）クラックはフランス語の手を打つという意味の語 claque の動詞 claquer に由来する語である。
14）The Histories of Appian, published in the Loeb classical Library, 1913
<http://penelope.uchicago.edu/Thayer/E/Roman/Texts/Appian/Civil_Wars/3*.html>（2015 年 10 月 31 日取得）
15）皇帝秘書官等も歴任したスエトニウスは 20 代の頃からネロの資料を集めていた。ネロの喝采団に関する記述は拍手研究の貴重なデータである。

参考文献

1）Aldrete, G.S., Gesture and Acclamation in Ancient Rome, John Hopkins University Press, 1999.
2）アリストパネス「蛙」内田次信訳『ギリシア喜劇全集３』、岩波書店、2009、199-315.
3）アリストテレス『政治学』、山本光雄訳、岩波文庫、1961.
4）アテナイオス『食卓の賢人たち１』、柳沼重剛訳、京都大学学術出版会、1997.
5）Bablitz, L., Actors and Audience in the Roman Courtroom, Routledge, 2010.
6）Cameron, A., Circus Factions: Blues and Greens at Rome and Byzantium, Clarendon Press, 1976.
7）Cartledge, P., Spartan Reflections, University of California Press, 2001.
8）キケロ『弁論家について（下）』、大西英文訳、岩波文庫、2005.
9）キケロ「セルティウス弁護」『キケロー選集１』、宮城徳也訳、岩波書店、2001.
10）Dictionary of Greek and Roman Antiquities, Harper & Brothers Publishers, 1882.
11）Dio, Dio's Roman History VIII, LCL176, Harvard University Press, 1925.
12）Dio, Dio's Roman History IX, LCL177, Harvard University Press, 1927.
13）エウセビオス『教会史（下）』、秦剛平訳、講談社学術文庫、2010.
14）Fay, J.M., "Hand-Clapping in Western Lowland Gorillas (Gorilla Gorilla Gorilla)" Mammalia, 1989, 53, 457–458.
15）フライシュハウアー, G.,『人間と音楽の歴史：エトルリアとローマ』、音楽之友社、1985.
16）Girard, C.,"Acclamation Voting in Sparta: An Early Use of Approval Voting" in Handbook on Approval Voting, Springer, 2012. 15-17.
17）ホメロス『オデュッセイア』、呉茂一訳、岩波文庫、1971.
18）エピクテートス『人生談義（上）』、鹿野治助訳、岩波文庫、1958.
19）Fergus, M., "Popular Politics in the Late Republic" in Leaders and Masses in the Roman World: Studies in Honor of Zvi Yavetz, Brill, 1995. 91-113.
20）Fishkin, J.S., The Voice of the People: Public Opinion & Democracy, Yale University Press, 1995.
21）Fossey, D., Gorillas in the Mist, Houghton-Mifflin, 1983.
22）藤田一美「modus inveniendi と modus proferendi 研究序説：プラトンとキケロ」『美学芸術学研究２』、東京大学美学芸術学研究室、1983、37-82.
23）Hamiru-aqui, 70 Japanese Gestures: No Language Communication, IBC パブリシング, 2004.
24）ヒックマン, H.,『人間と音楽の歴史：エジプト』、音楽之友社、1986.
25）ヘロドトス『歴史（上）』、松平千秋訳、岩波文庫、1971.
26）Holy Bible: New International Version, Zondervan Publishing House, 2011.
27）Kalan, A,; Rainey, H.J., "Hand-Clapping as a Communicative Gesture by Wild Female Swamp Gorillas" Primates, 2009, 50. 273–275.
28）カウフマン, W.『人間と音楽の歴史：古代インド』、音楽之友社、1986.
29）Kelly, J.N.D., Golden Mouth, The Story of John Chrysostom: Ascetic, Preacher, Bishop, Cornell University Press, 1995.
30）『口語訳聖書』、日本聖書教会、1955.
31）Koops, K.; Matsuzawa, T., "Hand Clapping by a Chimpanzee in the Nimba Mountains, Guinea, West Africa" Pan African News, 2006,13.19-21.
32）楠見千鶴子『ギリシアの古代オリンピック』、講談社、2004.
33）モリス, D.,『ふれあい』石川弘義訳、平凡社、1974.
34）モリス, D.,『ジェスチュア：しぐさの西洋文化』多田道太郎・奥野卓司訳、ちくま学芸文庫、2004.
35）モリス, D.,『ボディートーク：世界の身ぶり辞典』東山安子訳、三省堂、1999.
36）マニケ, R.『古代エジプトの音楽』、松本恵訳、弥呂久、1996.
37）Montagu, J., Origins and Development of Musical Instruments, The Scarecrow Press, 2007.
38）Nicolet, C., The World of the Citizen in Republican Rome, University of California Press, 1980.
39）太田秀通『スパルタとアテネ』、岩波書店、1970.
40）オウィディウス『変身物語（上）』『変身物語（下）』、中村善也訳、岩波文庫、1984.
41）パウサニアス『ギリシア案内記（下）』、馬場恵二訳、岩波文庫、1992.
42）パウサニアス『ギリシア記』、飯尾都人訳、龍渓書舎、1991.
43）ペロテット, T.『驚異の古代オリンピック』、矢羽野薫訳、河出書房新社、2004.
44）ペトロニウス『サテュリコン』、岩波文庫、国原吉之助訳、1991.
45）プラトン「ラケス」山本光雄訳『プラトン全集 4』、岩波書店、1973、233-284.
46）プラトン「エウテュデモス」山本光雄訳『プラトン全集 8』、岩波書店、1975、1-106.
47）プラトン「プロタゴラス」藤原令夫訳『プラトン全集 8』、岩波書店、1975、107-231.
48）プラトン「国家」藤原令夫訳『プラトン全集 11』、岩波書店、1976a、17-758.
49）プラトン「法律」森進一・池田美恵・加来彰俊訳『プラトン全集 13』、岩波書店、1976b、31-784.
50）プラウトゥス「アンピトルオ」『ローマ喜劇集 １ 』、木村健治訳、京都大学学術出版会、2000、3-100.
51）プラウトゥス「カシナ」『ローマ喜劇集 ２ 』、山下太郎訳、京都大学学術出版会、2001、3-101.
52）Plini, Letters and Panegyricus 1, LCL55, Harvard University Press, 1969.
53）プリニウス『プリニウスの博物誌１』、中野定雄、中野里美、中野美代訳、雄山閣、1986.
54）プルタルコス『プルターク英雄伝（１）』、河野与一訳、岩波文庫、1952.
55）プルタルコス『プルターク英雄伝（２）』、河野与一訳、岩波文庫、1952.
56）プルタルコス『プルターク英雄伝（８）』、河野与一訳、岩波文庫、1955.
57）ポリュビオス『歴史１』『歴史４』、城江良和訳、京都大学学術出版会、2013.
58）『コーラン（上）』、井筒俊彦訳、岩波文庫、1957.
59）W.J., Raschke, The Archaeology of the Olympics: The Olympics and Other Festivals in Antiquity, University of Wisconsin Press, 1988.
60）ラシード, S.A.『人間と音楽の歴史：メソポタミア』、音楽之友社、1985.

61）Roberts, A.I., “A Structure-Based Repertoire of Manual Gestures in Wild Chimpanzees: Statistical Analyses of a Graded Communication System” Evolution and Human Behavior, 2012, 33. 578-589.
62）シュミット, K.『現代議会主義の精神史的状況』、樋口陽一訳、2015.
63）Sherk, R.K., The Roman Empire: Augustus to Hadrian, Cambridge University Press, 1988.
64）スエトニウス『ローマ皇帝伝（上）』『ローマ皇帝伝（下）』、國原吉之助訳、岩波文庫、1986.
65）杉勇・三笠宮崇仁編『古代オリエント集(筑摩世界文学大系 1)』、筑摩書房、1978.
66）タキトゥス『同時代史』、國原吉之助訳、筑摩書房、1996.
67）タキトゥス『年代記（上）』『年代記（下）』、國原吉之助訳、岩波文庫、1981.
68）高田康成『キケロ：ヨーロッパの知的伝統』、岩波新書、1999.
69）ヴェーグナー, M.『人間と音楽の歴史：ギリシア』、音楽之友社、1985.
70）West, M.L., Ancient Greek Music, Oxford University Press, 1994.
71）クセノポン『キュロスの教育』、松本仁助訳、京都大学学術出版会、2004.
72）クセノポン『ソクラテスの弁明・饗宴』、船木英哲訳、文芸社、2006.
73）矢向正人「動物の音声コミュニケーションと音楽との境界」『芸術工学研究 9』、33-48、2008.